

## 報告2： 「明清科挙制度の文化史的研究」討論会開催報告

平田 昌司

京都大学大学院文学研究科 教授

科挙は、6世紀末から1905年の廃止に至るまで、1300年間にわたって機能してきた中国の官僚資格者選抜試験であって、東アジア諸国の制度にもさまざまな形で影響を与えた。日本において一般向けに刊行された科挙関連文献をあげてみると、清代の制度を中心とした狩野直喜『清朝の制度と文学』（みすず書房、1984年）、宮崎市定『科挙史』、同『科挙 中国の試験地獄』（上記2点はいずれも『宮崎市定全集』第15巻、岩波書店、に収録）、唐宋に重きをおいた村上哲見『科挙の話』講談社学術文庫、2000年。初版は1980年）、平田茂樹『科挙と官僚制』（山川出版社、1997年）、『アジア遊学』第7号・特集宋代知識人の諸相（勉誠出版、1999年）、試験による社会階層の流動化を中心的に論じた何炳棣『科挙と近世中国社会』（平凡社、1993年）などがある。中国・韓国などにおいて刊行された研究業績は、さらに数多い。

2000年に入って刊行されたベンジャミン・A・エルマン教授『後期帝政中国における科挙の文化史的研究』（以下、『科挙文化史』と略称。Benjamin A. Elman, *A Cultural History of Civil Examinations in Late Imperial China*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 2000.）は、こうした著作のいずれとも異なる特色をそなえ、今世紀の科挙研究をしめくくるにふさわしい重要な大著である。

エルマン教授は、1946年生まれ、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の歴史学の教授、明清代の思想史・教育史・科学史の研究で知られ、現在はプリンストン高等研究所に滞在中である。日本への紹介は、濱口富士雄氏訳「閻若璩の宋明儒学に対する依存」（『斯文』82、1979年）、小島毅氏解題・秦玲子氏訳「再生産装置としての明清期の科挙」（『思想』810、岩波書店、1991年）、伊東貴之氏訳「成王は何処に？」 明朝初期に

おける儒学と帝政イデオロギー（『中国 社会と文化』第7号、1992年）、恩田裕正氏訳「明代後期の科挙における「自然学」」（『中国 社会と文化』第11号、1996年）、吉田純氏の『哲学から文献学へ』書評（『中国 社会と文化』第5号、1990年）、平田の『経学・政治・血縁 後期帝政中国における常州今文学派』書評（平成5-7年度科学研究費報告書『中国の方言と地域文化（3）』、1995年）などがある。

「後期帝政」とは、ほぼ明代から清代に相当する時期、15世紀から19世紀までの500年をさす概念として、アメリカの中国研究者のあいだで広く用いられる術語である。本書は、20世紀前半の近代化の過程で中国の知識人がよく口にしていた、科挙を悪ととらえる言説に同調しない。「後期帝政中国」の科挙制度は、帝政 地域エリートという共同関係において維持され、当時の社会の中で人材選抜制度として有効に機能していたとするのが、エルマン氏の基本的な立場である。全体の目次は、第1章「後期帝政科挙の歴史的淵源再考」、第2章「明代初期における帝政権力・文化の政治学・科挙」、第3章「後期帝政科挙における制度の力学とエリートの流動化」、第4章「受験者収容所（貢院）と帝国権力の限界性」、第5章「後期帝政科挙における古典語のリテラシー・社会的次元」、第6章「情緒不安・成功の夢と受験生活」、第7章「エリートにとっての科挙と八股文の文化的視界」、第8章「試験官の基準・知識人の理解、帝国による知的支配への制限」、第9章「科挙と自然学・歴史学・考証学」、第10章「清朝統治下における制度改革の進展」、第11章「脱正統と脱経典：清朝末期試験改革の陥穽」、附録1「科挙に関する一次資料 1148～1904年」、附録2「モルモン教会家族史図書館所蔵の科挙一次資料」附録3「表」、附録4「科挙カリキュラム変革年表」からなり、文化史の大きな流れへ踏み込もうとする本書の特色は見て取れるであろう。全体的な研究手法の特徴については、後の唐澤靖彦氏のコメントにまとめられているので、ここには述べない。最も貴重だと感じられる点は、既に知られている資料を新視点から巧妙に再解釈してみ

せるという態度をとらず、歴年の科挙試験問題・答案など、従来の研究者がほとんど参照していない膨大な一次資料を丹念に掘り起こし、そこから読み取れる出題者・受験者の心的態度をひとつひとつ明らかにしようとしていることである。

この著作の完成を受けて、2000年1月3日から15日までの日程でエルマン氏を日本に招聘し、京都大学・東京大学において2回の討論をおこなった。京都においては、1月9日、京大会館（京都市左京区）において開催し、中国史学・中国文学・中国思想史の各領域から合計30名の参加者があった。会の開催された時点で、『科挙文化史』はまだ最終校正が完了した段階にあり、出版に至っていなかったため、事前に校正刷1揃いを送っていただき、関係者数名が分担して目を通し、コメントをまじえたかたちで内容紹介と質疑をおこなうこととした。

討論会は、夫馬進氏（京都大学文学研究科教授、中国史）によるエルマン氏の業績に関する紹介ののち、前半・後半の2部にわけておこなわれた。第1部「総論」は、エルマン氏による自らの研究方法の解説につづいて、唐澤靖彦氏（立命館大学文学部助教授、中国史）による解説。休憩ののち、第2部「各論」は、エルマン氏によって新著の第9章「科挙と自然学・歴史学・考証学」の内容を中心とした報告、ついで平田が言語文化史の立場からの論評と質問、高嶋航氏（京都大学人文科学研究所助手、中国史）による清代史・近代史の立場からのコメントがあり、最後に参会者からの質問を受けて終了した。この間、エルマン氏は、長らく使っていないので下手になったと謙遜しつつ、日本語による報告、また質問への回答を、よどみなく行われた。本稿に附したコメント3編は、当日の発言・議論をふまえつつ、唐澤氏・高嶋氏および平田が書き下ろしたものである。

乞いに応じて遥かプリンストンからわざわざ来日してくださったエルマン教授、最終校正刷を特別に送ってくださったカリフォルニア大学出版局、非常に限られた時間の中でコメンテーター担当の準備をしてくださった唐澤靖彦氏・高嶋航氏に深く感謝する。また招聘計画立案段階から、唐澤氏のほか、杉山正明氏・夫馬進氏・小島毅氏が相談にのってくださったのはたいへんありがたいことであった。故島田虔次先生が、体調がすぐれないので欠席せざるを得ないむね、ていねいな電話連絡をくださったことも思い出される。

（A04「古典の世界像」班）

## コメント1

### Benjamin Elman, *A Cultural History of Civil Examinations in Late Imperial China.*

その社会文化史的枠組みについて

唐澤 靖彦

立命館大学文学部 助教授

科挙とは、後期帝政中国において、頂点の合格者から広い裾野に至る識字層を社会にもたらした試験制度である。というのは、とりわけ明清時代においては、一定程度の資産を有する家族や宗族の一員として生まれた男子であれば、そのほとんどがそこでの成功に向けた読み書きの教育を受けたからである。合格のトップ層は官僚として帝政統治の一翼を担い、それより下の層でも社会的威信と経済的優遇を受け、長期にわたって不合格であり続けた者には一定程度の識字能力を与えたと同時に、批判的ルサンチマンを残した。科挙という制度は、明清中国における政治的支配のあり方を規定し続けただけでなく、読み書き教育のあり方を規定した意味において、広く文芸や美学や哲学といった領域にも深く影響し、また特に男子の心性のあり方にも深い影響を与えた。

2000年春に上梓された Benjamin Elman の *A Cultural History of Civil Examinations in Late Imperial China* (University of California Press) は、「題本」や『巴県档案』といった档案資料（中央から地方にいたる種々の行政機関が作成、保存する書類であり、現在は「档案館」という公文書館に整理、保存されている）を始めとする、従来は利用されることの少なかった史料も活用した、科挙制度に関する包括的著作である。本書の意義の一つは、まさにその包括性にある。つまり、従来は社会移動といった側面や政治イデオロギー的側面で語られることの多かった科挙という制度に、社会文化史的照明を投げかけ、この制度が後期帝政中国の文化をどのように規定し、どのように再生産し、またどのように制度自体が変化していったかを詳述している点にある。小稿の目的は、後期帝政期の科挙制度の諸側面を扱っているこの大著が、社会文化史という研究視角において持ちうる意義を筆者なりに検討することである。そのため、中国史の知識が豊富でない